

教室に入れない女子生徒との関係づくりのプロセス：  
支援者の役割に着目して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長井, 亮太 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00010227">https://doi.org/10.14945/00010227</a>

# 教室に入れない女子生徒との関係づくりのプロセス

——支援者の役割に着目して——

長井亮太

Building Relationships with Students with Classroom Difficulties:  
Supporters' Contribution  
Ryota NAGAI

## 1. 研究の背景・目的

文部科学省(2016)の「不登校児童生徒への支援に関する最終報告」によると、近年横ばい状態であった不登校児童生徒数が平成25年度、26年度と2年連続で増加しており、依然として深刻な状態が続いている。不登校傾向の子どもは、クラスでの自分の立ち位置や役割に悩み、そのことが登校意欲を削いでしまうことや、クラスに馴染めないことに罪悪感を抱えてしまう場合がある。登校できない状態が続くことは、不登校児童生徒にとっては否定的感情や信念に二重にも三重にも取り囲まれることを意味し、精神的に極めて苦しい状況に追い込まれていると言えるであろう。

本研究では、ある中学校の「学習室」と呼ばれる部屋で別室登校をしている生徒たちに着目し、支援員という立場から別室登校を続けている生徒たちとの関係性を構築しつつ、その中で読み取ることができた支援対象生徒の変化の過程をたどり、別室登校生徒に対する支援の在り方を明らかにすることを目的とする。

樋口(2013)の適応指導教室に関する研究では、適応指導教室で、異なる支援目標のもとで支援が行われた結果、いかなる効果があったのかを調査しており、「単に「学校復帰」のみを単独の支援目標とする場合の効果よりも、「心の居場所」支援から「学校復帰」支援へと二段階の支援目標を設定する方が、「学校復帰」率が高くなることが窺える。」(樋口 2013)と述べられており、このことから、支援対象生徒との間に一定の人間関係を作ることで、学習室が心の居場所となり、登校への一助になるのではないかと考えた。

## 2. Aとの二者関係の構築

### (1) 目的

別室登校生徒のうち、1人の女子生徒A焦点を当て、彼女と支援員との関係づくりを進める中で、まず第1に支援対象生徒と支援員との二者関係の変容過程を明らかにする。第2に、支援対象生徒と支援員の二者関係だけでなく、学校に存在する様々な支援者との関係の中で変容していく対象生徒の観察を通して、それぞれの支援者が持つ役割を明らかにする。

### (2) 方法

4月から支援員としてB中学校に所属し、1年生学級・特別支援学級・学習室の3か所で支援活動を行って来た。関わりを持った生徒たちの中で、学習室に登校する1人の女子生徒Aを参与観察対象に選び、観察対象生徒Aとの対話や行動観察結果をフィールドノートに記録した。フィールドノートは、主にAと人間関係の変化に着目し、対話の内容やAの行動特徴、Aと他の生徒

や職員の関わりの様子などを記録した。

このようにして収集されたフィールドノートの記録を分類・整理し、生徒指導支援領域に所属する教員・大学院生との集団的検討を経て、これまでの二者関係の変容を第1期から第5期までの段階に分けて記述し、「筆者とAの二者関係の考察」「各支援者たちの活動」「登校のきっかけ」の3つの観点からまとめた。

### (3) 結果と考察

筆者とAの二者関係の変容を以下の表1にまとめた。

表1 二者関係の変容過程

	特徴的なエピソード	二者関係の変容の過程
手探りの支援段階	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習室の生徒に配布していたが、その中の一部「ゲーム・漫画・アニメ」に関してRが興味を示し、それを共通の話題にして二者関係の構築を図ったところ、お互いの趣味の一致が判明して以来、Rは、筆者が昼休み等に学習室に入っていくと筆者のところにやってきて会話をするようになった。</li> </ul>	<p>当たり障りのない会話をしていたが、お互いの趣味の一致から、その話題を中心に話し始めるようになる。初対面時から比較的良い関係がきずけている。</p>
二者関係の接近	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第1期から比較的良い関係が築けていたおかげか、R自ら自身の家庭事情や、過去、進路についても語ってくれることがあった。</li> <li>・これまではこちらから声をかけて話をしてきたが、昼休み等に筆者が学習室で作業をしていると、自ら近寄ってきて話を始めたり、筆者の作業を手伝ってくれたりするようになる。</li> <li>・5時間目が学年集会であり、会場の隅の方で見学する予定であったため、昼休みに筆者に「10分前くらいになったら一緒に行こうよ」と声をかけてきた。</li> </ul>	<p>これまでのコミュニケーションから、筆者に対する警戒が薄れたのか、彼女からの自己開示が始まった。また、積極的に筆者とコミュニケーションを図るようになり、軽いスキンシップも図ってくるようになった。これらことから、第1期よりも筆者に対して気を許していることがうかがえ、二者関係のさらなる接近が見られた。</p>
休養期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・修学旅行を終えてから、これまでの反動か、Rは一切学校に来なくなった。</li> <li>・2週間ほど欠席が続いたとき、Rが登校するきっかけがないのではないかと考えたので、Rが帰ってくる環境があることを伝えようと、プリントの切れ端にコメントを書き、Rが来た時に目に入るように、彼女の個人ファイルに挟んでおく活動を始めた。</li> </ul>	<p>休養期は全く会うことはなく、筆者からは連絡もしていないので、二者関係に変化は見られなかった。</p>
筆者への依存傾向	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動ではゲームも行うのだが、そのゲーム中にRは筆者に対して「大人げない」「先生失敗して」など軽口を言うようになっていた。</li> <li>・筆者に自身のSNSのアカウントを教えようとしてきたが、「一応、僕ら先生と生徒やからね。そういうのダメなんだわ。ごめんな」と断った。</li> </ul>	<p>以前よりさらに筆者との距離感が近くなり、筆者に対する警戒はほとんどなくなっている様子。SNSのことを見ると、何らかの形で筆者とつながっていたい思いがうかがえる。</p>
筆者との関係を維持しつつも再び不登校へ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・来年の話になると「あー、受験じゃーん。受験嫌だー」と何度も呻っていた。</li> <li>・KMさんが近くに行くと(体育祭の練習を)見学しているところを見て「あの子すごいね。おとなしそうな子なのに、あんな風に行って。私はできないなあ」とこぼす。</li> <li>・友達と一緒に図書館に本を借りに行く際「その友達は他の友達から「なんでそっちいくの?」と言われることもあり、大変そうだ」と語っていた。</li> </ul>	<p>筆者とRの会話に、他者に関するものが出てきており、R自身の他者との対比、その中で生まれる葛藤や不安を筆者に話してくれるようになったが、10月から再び欠席が増え、ほとんど会えなくなってしまった。</p>

4月から10月までの7ヶ月間、12回の面談を実施する中でAとの関係性の変容を第1期から第5期の5段階に分けて分析した結果、表1に示すように徐々に関係性が近づいていく様が見て

取れた。比較的スムーズに A との関係づくりを進めることができた背景には、A との間に共通の趣味があり、共通の話題があることが二者間のコミュニケーションの心理的なハードルを下げたためだと思われる。第 1 期ではその共通の話題を用い、当たり障りのない会話を続けていたが、第 2 期では A 自身の複雑な家庭や過去にあったこと、将来の進路のことなどの自己開示をするようになり、第 3 期で休養期として欠席が続いたものの、第 4 期では、軽口など気を許して話せる存在として捉えていることが視え、二者関係の進展が感じられた。第 5 期では第三者の生徒の話題が出始め、彼らと A 自身を比較したことによって生じた不安や葛藤を吐露する場面も見られたが、再び欠席が目立つようになり、ほとんど登校できない状態に戻ってしまった。

また、A との関係作りをする過程で A の周りの支援者の活動が見えてきた。そこで、A と直接的な支援関係を持つ学級担任、相談員、特別支援教育コーディネータ及び支援員（筆者）の活動を比較したところ、それぞれの支援者の活動は「A との直接コミュニケーション」「学習支援」「行事等の情報提供」「電話連絡・家庭訪問」の 4 つに分類され、各支援者で支援の頻度が違うことが明らかになった。

表 2 各支援者の支援内容と頻度

	直接コミュニケーション	学習支援	行事等の情報提供	電話連絡・家庭訪問
担任	○		○○	○○○
相談員	○○○	○	○○○	○○○
コーディネータ	○	○○	○○○	
支援員(筆者)	○○○	○○○		

表 2 から、それぞれの支援者で活動に大きく差があり、それぞれの立場で得意分野があることがうかがわれる。お互いがそれぞれの支援者の活動を把握し、補い合って支援にあたることが大切になってくるはずである。その中でも、京都府教育委員会(2012)の調査が明らかにした、直接的コミュニケーションの大切さを踏まえると、共に過ごす時間が長い相談員や支援員の立場から、不登校問題解決の糸口が見えてくるのではないかと考えられる。ただし、それぞれの支援者で得手不得手があるので、それぞれの得意分野を活かして支援していかなくてはならない。そのためにも各支援者間での情報共有を積極的に図り、知りえた情報や支援対象者の状態などを共有し、それぞれの支援者が本人や保護者にとってより良い対応ができる準備をしておくべきである。

また、A との関係性の構築を進めていく中で、効果的な関係づくりと、A を取り巻く支援者の活動が明らかになり、その結果、『気の合う他者』と『学校行事』の 2 つの要素が彼女の登校のきっかけになりうるのではないかと考えた。

A は別室登校生徒の中では比較的コミュニケーション能力が高く、筆者とも初対面のうちから打ち解け、積極的に会話ができていた。しかし、それは共通の話題によるところが大きく、特定の人間以外とはコミュニケーションをとっている姿が見られなかった。相談員や担任等の学校職員とは学校関連の話題があり、筆者とは共通の趣味があり、そういった面で学校の職員とはコミュニケーションをとることができているが、同じ別室登校をしている生徒とはほとんど会話する場面が見られなかった。このことから、A は共通の話題を持っている相手とは会話しやすく、関

係を構築しやすいことがうかがえ、昨年度の出席状況と今年度前半の状況から判断すると、構築した人間関係が登校のきっかけになりうるのではないと言える。

学校行事に関しては、昨年度と今年度の A の記録を見ると、見学など参加の形は様々ではあるが、学校行事への参加率は高く、昨年度から見学という形で参加できている。今年度も体育祭の全体練習や学年練習を見学できしており、本番も遠くから見学しており、今年度の修学旅行に関しては、修学旅行の説明を行う学年集会にも近くで見学する形で参加できしており、当日もクラスの班と一緒に宿泊し、行動できていた。このように、学校行事を有効な登校への手立てと考えることもできる。しかし、必ずしもうまく機能するとは言えず、新たな問題を発生させてしまう恐れもあることから、注意が必要である。

### 3. 学級担任と学校相談員のインタビュー分析

#### (1) 目的

A の主な支援者である学級担任の C 先生と、学校相談員の D さんにインタビューを行い、それぞれの立場から A にどのような風にかかわっているのか、どのような支援をしているのか、支援するにあたって困っていることは何かを調査し、両者の連携点・支援の工夫可能性を、支援員として関わっている筆者の視点から考察することを目的とする。

#### (2) 方法

学級担任の C 先生と相談員の D さんに、それぞれ 10 分程度のインタビューを 1 回行い、現在の A の支援について、それぞれの立場での考えを聞く。インタビュー内容を IC レコーダーで録音したものを文字起こしし、二人の回答から支援の連携点・工夫可能性を探る。

学級担任は B 中学校の勤務歴が 7 年目。相談員は B 中学校に支援員として 2 年、相談員として 5 年の、計 7 年の勤務である。

インタビュー内容は以下の通りである。

#### 《学級担任の C 先生へのインタビュー内容》

- ・最近欠席が多いが本人・保護者と話ができているか
- ・家庭訪問・電話連絡等の頻度はどのぐらいか
- ・他職員との連携はどのようにとっているか
- ・支援するうえで困っていることはなにか
- ・学習室に求めることはなにか
- ・支援員に手伝えることはないか

#### 《相談員 D さんへのインタビュー内容》

- ・A さんの特徴の見立て
- ・A 本人・保護者と話せているか
- ・支援するうえで困っていることはなにか
- ・他職員との連携はどのようにとっているか
- ・支援員に手伝えることはないか

#### (3) 結果と考察

2 人の支援者にインタビューを行った結果、2 人の回答や発話から重要であると思われた箇所

を、それぞれ担任と相談員の記録の中から抜き出すと、「A 本人の理解について」「A の家庭に対してのアプローチ」「他職員との連携について」の 3 つの領域に分けることができた。

担任と相談員が行っている支援は「A 本人の支援」と「家庭への支援」の二つであり、その二つは独立したものではなく、「A 本人の支援」が「家庭への支援」に繋がっていたり、「家庭への支援」が「A への支援」に直結していたりと、お互いが作用し合っている両輪であることが導き出された。また、その 2 つを繋ぐものとして「他職員の連携」がなされており、担任と相談員がうまく連携しているからこそ、家庭への連絡を絶やすことなく行うことや、本人への支援に一貫性を持たせることができており、支援の現状維持ができているものと思われる。

しかし、今のところ現状維持の状態が止まってしまっており、今後の支援が見えていないことが事実であり、そのような状態を打開するためにも、学校での支援に限界がある状況では、外部の機関に接続することも考える必要がある。現在の不登校の問題は学校のみで対応することが難しく、積極的に、より専門性の高い外部機関と連携して支援に当たっていくことも視野に入れておくべきであると考えられる。

また、B 中学校で支援員として活動したことから、学校現場において支援員の役割が明確にされていないという印象を受けた。職員も支援員に何をどこまでお願いしてよいのか分からず、支援員もどこまで指導に介入してよいのか分からないと言った点や、教員によって支援員に積極的に声をかけてお願いをする人とそうでない人がいる点もあり、もう少し役割を明確化し、共通理解を持った方がよいのではないかと感じるどころが何度もあった。

現状で学校現場では担任と相談員に、「支援員としてできること・手伝えることはないか」と尋ねたところ、両者とも「特にない」との回答であり、支援員が役に立てることはないかと思われたが、相談員が「今うまくやったださっている」と回答しており、現状の、A との関係づくりの支援、学習支援、職員との連携等の支援が微力ながら役に立っていることがうかがえた。つまり、いかにして現状の支援をより強固なものにしていくかということが、支援員の今後の課題になるのではないかとと言える。

#### 4. 研究の成果

B 中学校で支援員として活動する中で、対象生徒 A の支援については、再登校や教室復帰には結びつけることはできなかったが、不登校生徒の支援に今後取り組む上で支援員にとって重要な手がかりとして活用できる糸口が見いだされた。

第 1 に、関係性を作りづらい不登校生徒であったとしても、彼ら彼女らと間に共通の話題を持っていることが関係作りに大きく影響するということである。本研究では対象生徒の教室復帰は促すことができなかったが、登校頻度については大きく改善した時期があった。A の登校する日を見ると、支援員として学校に入る日と重なっていることから、対象生徒 A との間に共通の趣味があり、何度もコミュニケーションをとることができたことが、登校に影響を与えた可能性がある。

第 2 に不登校生徒の登校のきっかけになりうる条件として、「気の合う他者」の存在が不登校生徒のきっかけとなりうること、また、学校行事には比較的参加しやすいことが明らかになった。支援者は、これらの条件を不登校生徒それぞれの実態に合わせて提供する必要があるだろう。

第3に、それぞれの支援者で支援内容に得手不得手があることを互いに認め合った上で連携のあり方を探ることが必要であるということである。支援に関わる職員は複数いるが、それぞれの立場で支援内容と頻度が大きく違っていることが明らかにされたことを受けて、それぞれの得意分野を活かした活動を遂行できるようにするためにも、職員相互の連携は欠かせないものとなるであろう。

## 5. 今後の展望

### (1) 今後のAの支援

研究は10月末で終了したが、Aへの支援は引き続き行っていく。現状でAは殆ど登校できてはいないが、担任や相談員は変わらず連絡を取っている状況が続いている。ここに介入することは難しいと思われるので、彼女が登校してきたときの支援に限られるであろうが、これまでの支援で築き上げたAとの人間関係を維持しつつ、3月に受験を控える彼女の進学のための支援が当面する重要な課題の一つになるであろう。

### (2) 今後の不登校生徒に対応する支援員の在り方

不登校の生徒は、それぞれが異なった困難さを抱えており、どの生徒も長期的な支援が必要であるが、不登校の生徒として一括りに考えてしまうと同時に、問題を早期に解決しようとしてしまいがちである。特に支援員という限定的な支援しか行うことのできない立場では、生徒の問題を解決することを目的に活動することは一層困難であり、生徒にも無理な負担をかけてしまう恐れもある。そのような立場で行える支援は、別室登校であっても登校すれば自分を理解してくれる人が学校にいると思えるような関係づくりである。そのため、生徒が別室に登校してきた際は学習指導等を通してだけでなく、休み時間等に積極的に別室を訪れ、雑談を通して少しずつ関係を作っていくことが重要である。しかし、どの生徒にも支援者にも相性の合う、合わないがあり、どうしても合わない相手がいるかもしれない。そういった場合に備え、担任や相談員などの固定されたメンバーだけが支援にあたるのではなく支援員が入ることで、サポートの幅が広がるのではないだろうか。

#### 《参考資料》

樋口 くみ子 2013 「教育支援センター(適応指導教室)の四類型」[online]

[http://www.niye.go.jp/kanAi/upload/editoA/82/File/3-1\\_.pdf](http://www.niye.go.jp/kanAi/upload/editoA/82/File/3-1_.pdf)

文部科学省 2016 「不登校児童生徒への支援に関する最終報告：一人一人の多様な課題に対応した切れ目のない組織的な支援の推進」[online]

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/08/01/1374856\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/08/01/1374856_2.pdf)

京都府教育委員会 2012 「別室登校Ⅱ：教室復帰に効果的な関わり」[online]

[http://www.kyoto-be.ne.jp/gakkyou/cms/?action=common\\_download\\_main&upload\\_id=59](http://www.kyoto-be.ne.jp/gakkyou/cms/?action=common_download_main&upload_id=59)